

山添村古文書調査だより

奈良大学文学部史学科研究チームと山添村教育委員会による共同調査・研究

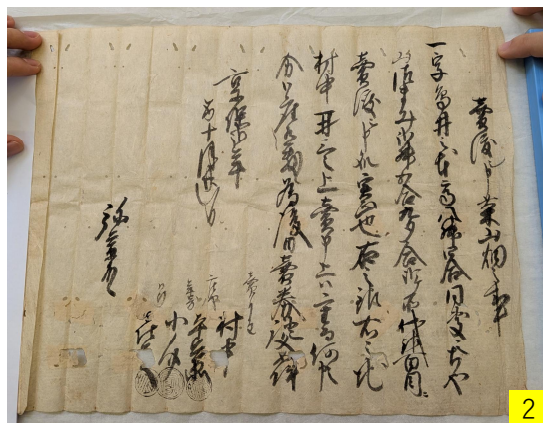
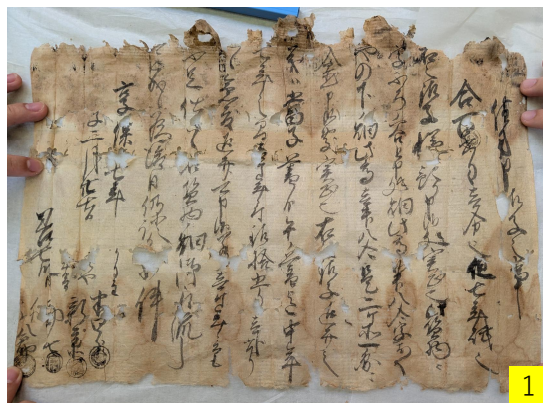
2026年9月2日（水）～3日（木）の2日間にわたって、奈良県山辺郡山添村教育委員会のご協力のもと、古文書調査を実施することができました。山添村での古文書調査は2015年春以来、これで23回目となります。

調査場所は、山添村大字岩屋の東豊ベース（2001年3月閉校の旧山添村立東豊小学校）を使用させていただきました。

整理したのは、前々回の2025年8月から作業を進めてきた大字北野の徳谷家文書です。大和国添上郡北野村は、江戸時代には奥方（北野奥村）と西方（北野西村）の二つの集落に分かれていて、領主は同じでありながら、庄屋・年寄という村役人が別々に置かれていたことが、徳谷家文書の調査で明らかになっています。徳谷家はそのうち、奥方の庄屋を務めていて、近代では北野村の副戸長や大字北野の常設委員も歴任していました。

山添村の全30大字のうち、これまで、北野、春日、菅生、上津、広代、広瀬、片平、葛尾、三ヶ谷、勝原、毛原、助命、大塩の13大字から出てきた史料を調査させていただきましたが、典型的な庄屋文書となると、徳谷家文書が初となります。その点で同家文書はとても重要になるのですが、残念ながら保存状態があまり良くなく、なかには湿気と水損と虫食いで「大きなゴミの塊」のようになっています。ですがよく見ると、中身を読み取れる史料がいくつもあることがわかり、それらを丁寧に取り出しながら、カードを採っていきました。

写真1・2も、その「ゴミの塊」のなかから救い出した史料で、写真1は享保17年（1732）の「借用申銀子之事」、写真2は享保2年（1717）の「売渡シ申茶山畑之事」となります。ともに、北野村奥方の住民同士で交わされた契約と考えられるもので、前者の借金証文では、借り主の半四郎が庄屋・年寄と連名にて、2ヵ所の畑を担保に、善七から銀106匁1分を7年賦で借りています。毎年



年でほぼ元本と同額となりますから、どうやら善七は、無利息で半四郎にお金を貸していたようです。貸し手と借り手の信用関係の深さがうかがえます。

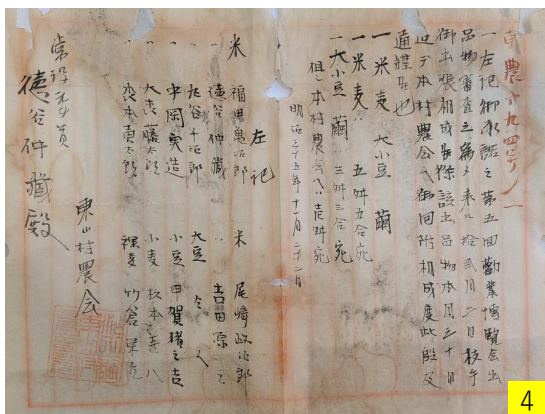
一方、写真2では、茶山畑の売り主が「村中」となっていて、北野村奥方が村の共有地として山あい茶畑を所有し、それを同じ村のなかの弥兵衛に売り渡したことがわかります。共有地として村全体で管理するより、個人持ちの土地にした方が村の負担も減っていだろう、と判断されたのかもしれませんが。

江戸時代の「選挙」に関する興味深い史料も「ゴミの塊」から出てきました。写真3の右下に映る包紙には、「天保七申年九月朔日之夜、繁治年寄退役二付、跡役常江江札数之事」と記されていて、天保7年（1836）に繁治が北野村奥方の年寄を退役するにあたり、9月1日の夜に開かれた村の寄合で「跡役」の選挙がおこなわれ（当時、「入れ札」と呼ば



れていました)、投票の結果、常治が「札数」多数にて後任年寄に選ばれたことがわかります。ここで重要なのは、包紙のなかに投票用紙も含まれているところで、「常治(次)」票が多い一方、「武平」「清蔵」「隼人殿」など他候補を推す村人もいて、江戸時代の村役人選挙が単なる信任投票ではなく、「真面目」におこなわれていたことがうかがえます。

近代の公文書も「ゴミの塊」から救出できました。写真4は明治35年(1902)、東山村農会から大字北野の常設委員・徳谷仲蔵に宛てられた通知で、翌36年(1903)、大阪で第5回内国勧業博覧会が開催されるにあたり、大字北野からも米、小麦、裸麦、大豆、小豆、繭を出品予定だったようで、米の出品予定者には徳谷仲蔵の名も見えます。第5回内国勧業博覧会は、来場者が435万人にも及んだ戦前最大の博覧会で、その人気ぶりを北野の人びとも支えていたわけです。



前回2026年3月の「調査だより」でもお伝えしたように、近隣から遠方各地の御札が膨大に残されているのも徳谷家文書の特徴で、今回の調査でその点数が300点近くに及

ぶことが判明しました(写真5)。そのなかには、「和州象谷(きさだに)神主 前川信濃守」の「櫻木大明神御守札」のように、奈良県吉野町大字喜佐谷に所在する桜木神社の神主が配札した御札もあれば、「神影講」の「遠州秋葉山御祈禱之札」のごとく、静岡県浜松市の秋葉神社を支える講員に配られたものもあります。一つの家から御札が数百～千点レベルで出てくるのは、兵庫県加西市を事例とした幡鎌一弘氏の先駆的な研究でも注目されているところで、徳谷家の御札はそうした研究を進展させることになるでしょう。



今回採ることのできたカード点数は、徳谷家文書箱1のNo.230～401、箱3のNo.131～460の計501点で、徳谷家文書の整理を終わらせることができました。この成果は、北野の消防団文書とあわせて、2027年に刊行する『山添村文化財調査報告』第8集でまとめられる予定になっています。

調査参加者は、本学学生有志延べ37名(9月2日16名、3日21名)です。

教員は、奥本武裕、海津一朗、河内将芳、木下光生、森川正則の5名があたりました。

山添村での調査は今後も継続していきたいと考えています。調査にあたって便宜を図ってくださったご所蔵者と山添村教育委員会の皆さまに厚くお礼申し上げます。

